

博士學位論文

内容の要旨及び審査の結果の要旨

課程修了によるもの（課程博士）

第6号

平成22年9月

東北福祉大学

は し が き

この冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日）第 8 条の規定による公表を目的とし、本学にて博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果を収録したものである。

今年度に授与した学位は博甲第 6 号博士（社会福祉学）である。

課 程 博 士

総 合 福 祉 学 研 究 科

社 会 福 祉 学 専 攻

氏名（本籍）	鈴田 泰子（日本）
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記の番号	博甲第6号
学位授与年月日	平成22年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条1項該当（課程博士）
学位論文題目	発達障害児のコミュニケーション障害の 支援に関する実践的研究
論文審査委員	主査 教授 菅井 邦明（東北福祉大学） 副査 教授 木村 進（東北福祉大学） 副査 教授 三浦 剛（東北福祉大学） 副査 教授 川住 隆一（東北大学）

《論文内容の要旨》

I. 論文の構成と概要

1. 論文の概要

発達障害児は生活の中で多種多様な課題を抱えているが、本論文ではその課題をコミュニケーション障害の観点から観察モデルを作成し、その障害の実態を把握すると同時に、障害状況を解決・支援するための視点を明らかにし、さらにその支援活動で支援システムを構築し、スクールソーシャルワークの視点が不可欠であることを実証した。

本論文の内容は、①主にコミュニケーション障害に関する理論仮説と観察モデル、及び実践結果（3章から7章）と、②ある事例のコミュニケーション障害の支援活動から、支援システムをスクールソーシャルワークとの関連で考察した（8章と9章）の二つに分けられる。

このような実践的研究は本邦では初めであり、今後この領域の実践的研究に有益な資料となると思われる。

2. 論文の構成

第1部 研究目的と方法

序章 問題と研究目的

第1章 発達障害の定義に関する基本的問題点

第2章 発達障害児の支援における基本的問題点

第3章 研究方法

第2部 研究の展開

第4章 発達障害児の生理・認知特性と不適応行動の関連

第5章 発達障害児の認知・音声情報処理の特徴

第6章 SSTにおける発達障害児のコミュニケーション障害の分析例

—主として「ハンドベル演奏」場面の分析を通して—

第7章 教科学習における発達障害児のコミュニケーション障害分析の試み

第8章 高機能自閉症児の不適応行動への支援ネットワークの拡大と深化の事例

第9章 高機能自閉症児のコミュニケーション障害の支援に関する考察

—スクールソーシャルワークとの関連—

3. 論文の研究目的と展開

第1部では、本研究の目的を次の二つに設定した。

- ①発達障害児の生活場面全体におけるコミュニケーション行動の障害状況を把握する。
- ②発達障害児の生命活動のより良い展開を支援するスクールソーシャルワークの機能を明らかにする。

序章では、発達障害をめぐる日本の動向とコミュニケーション障害と研究目的について述べている。

第1章では、発達障害の概念の変容と問題点について、現時点における脳科学・医学研究の進歩と診断分類、さらに発達する子どもの行動変容過程における医学的診断の課題について述べている。

第2章では、発達障害児の支援課題の現状について整理した。

第3章では、研究方法について述べている。発達障害児のコミュニケーション障害の観察の観点と観察モデルについて鈴木モデルを説明している。そこで、

- ①発達障害児のコミュニケーション障害の個体特性把握の方法として、多領域として「家庭・学校・ソーシャルスキルトレーニング場面」の3つの領域から観察すること。発達障害児の情報処理を多水準の情報処理として観察するため、第1水準（認知・生理特性）、第2水準（認知・音声情報処理特性）、第3水準（生活行動における会話特性）、第4水準（学級における教科学習特性）を設定した。また、
- ②生態学的場におけるコミュニケーション障害の実態把握として参与観察、保護者面談、連絡帳、質問紙、さらにアクションリサーチとして実験的指導場面（ソーシャルスキルトレーニング場面・SST）を年間約20回設定する方法を設定した。

このように発達障害児と関わりながら実践的指導を展開する過程で、コミュニケーション障害を観察し、支援の視点を発見し、発達障害児に関わる保護者や学校関係者、教育委員会、病院、福祉大学特別支援研究室等の専門家・非専門家のネットワークのもとで支援を進めるという方法を用いた。

本研究の方法は、いわゆる課題解決型研究、事例の質的分析による仮説生成型研究、実験的指導研究、子どもの生きているフィールドを対象とした生態学的研究方法の手法を用いている。このように複数の研究手法による多様な視点を設定することによって、発達障害児のコミュニケーション障害を多様な視点から見るというこの領域では従来にない実践的研究である。

第2部は研究の展開である。

第4章では情報処理第1水準である発達障害児の生理・認知特性と不適応行動の関連を質問紙法で検討した。その結果過敏特性を多く持つ発達障害児は、学校において不適応行動を示すことが示唆された。

第5章では情報処理第2水準である認知・音声情報処理の特徴を動作・歌遊びを用いて明らかにした。発達障害児のコミュニケーション障害の課題の根底に身体レ

ベルの情報処理におけるつまずきがあることを示した。そして支援においてこの視点と支援方法について考察した。

第6章では情報処理第3水準である会話場面におけるコミュニケーション障害をSSTのハンドベル演奏場面を中心に研究した。その結果、11例の会話におけるコミュニケーション障害の諸相を明らかにし、指導の観点について述べている。

第7章では情報処理第4水準である教科学習という高度の情報処理場面におけるコミュニケーション障害を教師評価の通信簿から解明しようとした。しかし現在の通信簿の評価枠では解明が極めて困難であることが判明した。

第8章では高機能自閉症児の約3年間の支援過程を詳細に分析した。その結果学校内だけでなく、家庭、学校外の相談施設間のネットワークの形成過程、ネットワークの深化の過程を明らかにした。個人情報管理社会の中での保護者との信頼関係の深化は、数十回のSSTの指導場面や情報共有過程のなかで生まれ、それを土台に関連施設との情報の共有と支援の助言が得られた過程を明らかにしている。個人情報管理社会におけるこのような手法は新しい支援方法のあり方を示した。

第9章では、第8章の資料から発達障害児のコミュニケーション障害の課題とそれへの支援過程をスクールソーシャルワークとの関連で整理、考察していた。その中で、発達障害児の人生においてスクールソーシャルワークが必要であるとことを実証的に考察している。

《論文審査結果の要旨》

II. 論文審査結果の要旨

1. 論文の意義

現代日本社会、特に教育・保健医療・福祉・労働領域で喫緊の課題である発達障害児・者の支援についてコミュニケーション障害とスクールソーシャルワークの視点から研究を展開した極めてユニークな研究である。このような内容の研究を可能にしたのは、東北福祉大学の特別支援教育研究室を中心とした教育・福祉・保健医療施設の存在が大きな研究的土壌となっていたからである。

本論文の特色は以下のようなになる。

①発達障害児の不応・不適切といわれる行動をフィールド（現場）の関わりの中で究明し、その中で可能な限りコミュニケーション障害の条件を発見し、それを土台に支援システムを構築し、スクールソーシャルワークの視点から、支援方法を考察・開発するというアクションリサーチ研究方法をとった点が極めてユニークな点であった。

②個々の課題に対する研究方法の特徴について

本研究は、発達障害児を指導する（関わり）なかで、課題解決に必要な研究手法を可能な限り利用し、発達障害児が生活するフィールドで多次元・多層の情報を収集するという手法を用いた。そして実際には、第4章は主に質問調査、第5章は仮説実験指導、第6章は会話分析、第7章は通信簿分析という方法を用いた。

さらに8章では、事例の問題を解決するため、事例の生活場の情報を可能な限り観察すると同時に、指導場面の資料を収集し、ケースワークの手法の視点も加え、高機能自閉症児の生命活動の展開を援ける支援活動を試みた。第9章では、8章の事例の支援活動に関わる専門家・非専門家の支援内容を詳細に分析・検討し、その支援内容と専門家（著者）の役割を整理し、スクールソーシャルワークの必要性を述べた。

このように多くの研究方法を用いて発達障害児のコミュニケーション障害の特性を把握し、障害の解決手法を見つけ出すいわゆる融合的方法論を具体的に研究で提案したことは方法上高く評価できる。

③コミュニケーション障害の観察モデル（鈴田モデル）の特徴について

発達障害児のコミュニケーション障害を関わる側の関わり方と児の行動特性の二つの側面からとらえ、多水準情報処理モデルを作成した。家庭・学校・SST 場面という多領域の場の観察とコミュニケーション障害を情報処理の観点の4水準から観察し、障害のレベルを把握する試みは世界で初めてである。

このようなモデルによって、発達障害児のコミュニケーション障害の諸相を解明し、知見を得ることが出来たことは極めて高く評価できる。

④コミュニケーション障害を持ちながら生きる発達障害児への支援にスクールソーシャルワークの必要性を詳細な事例の支援過程から分析・考察してことは、これからの発達障害児・者の支援の在り方を考える上で、貴重な資料と考え方を示しと考えられる。

2. 論文に残された課題

以上のような成果を上げている本研究ではあるが、多くの課題も出てきている。さらに多くの事例の資料の蓄積の必要性、この新しい研究手法そのものの検討などである。

3. 博士（社会福祉学）の可否

このような課題はあるものの、個体—環境間の相互作用に焦点を当てたコミュニケーション障害とソーシャルワークの枠組みを踏まえ、情報処理水準ごとに相互作用を分析し、問題解決する支援システムを構築する態度と新しい知見の発見は評価できる。

上記のように本論文にはまだ検討しなければならない課題、研究手法がありますが、今後の課題として考慮し、博士論文に値するものとして評価できる。よって博士の学位（社会福祉学）を授与することが適当であると考えられる。

平成22年 9 月30日印刷
(非売品)
平成22年 9 月30日発行

発 行 東北福祉大学
編 集 東北福祉大学大学院事務室
印 刷 (株)ホクトコーポレーション